

# テ形節における統語的考察

吉 永 尚

## 1. はじめに

接続機能を持つテ形節については、現在までに多くの研究があり、主に意味用法に基づき多様な分類法が挙げられている。しかし、統語的側面からテ形節の接続構造を統括的に研究したものは、管見の限り殆ど見当たらない。本稿では、接続機能を担うテ形節の意味と統語を明らかにし、これらを分類整理する事を目的とする。まず、接続機能を持つテ形節について典型的な用法を抽出し分析を加え、中核的な意味内容によって2タイプに収束させる事ができる事について述べる。次に、これらのテ形節と主節との構造的な関係について考え、意味用法と統語構造との関係性について明らかにしたい。

## 2. テ形節の接続機能

- (1) 太郎はカバンを抱えて走った。(付帯用法)
- (2) 次郎は書籍部に行って教科書を買った。(継起用法)
- (3) 花子は体調を崩して仕事を一カ月休んだ。(因果用法)
- (4) 雅子がピアノを弾いて明子が歌を歌った。(並列用法)

これらのテ形は、様々な意味を持つテ形節の主動詞となるタイプであり、後続の主節とそれぞれの意味関係で繋がれている。(1) - (4) はテ形節の用法に関する加藤 (1995)、仁田 (1995)、Hasegawa (1996) などのテ形接続に関する主要な先行研究を総合した結果、最も普遍的であると思われる意味用法である<sup>注1)</sup>。いずれにしても、テ自体の持つ近い過去と接続の意味機能が現れていると思われる。以下、それぞれの用法について詳しく考察する。

### 2.1 付帯用法

- (5) 太郎は頬杖をついて本を読んでいた。

先行研究の付帯用法についての意味・用法に関する記述を総合すると、この用法は、テ形節で表わされている内容が後続節の内容について付帯状況的に修飾し説明する用法であると言う。また、どの研究においても主節との関係が最も従属的であるという点で、ほぼ一致している。

- (6) 太郎は歩いて学校に行く。

従属度が高く副詞に近づいていると思われるこれらの用法には、連用形に換えると座りの悪いものも多く観察される。

(7) 太郎は歩き学校に行く。

上例の様にテ形と比べると不自然である事が明らかである。

また、テ形節動詞の性質や目的語などの述語成分によって、修飾・説明の仕方が異なり、後述の継起、因果、並列節の意味関係がそれぞれ比較的単純であるのに対し、様々な意味に下位分類できる事もこの用法の特徴であると思われる。状態的な無アスペクト動詞は選択されず、結果持続か動作持続のどちらかの持続を表わす動詞が選択され、また、客体変化動詞は選択されにくいという選択的偏りが見られる<sup>注2)</sup>。

主節の内容を付帯状況的に修飾・説明するという用法は、前述の様にテの持つ膠着的な性格と時間的な緊密性によるものと判断され、多くの研究が一致して挙げている事は、前後節の主語や時間の一致である。この点に関して、付帯状況的に或いは容態副詞的に修飾・説明するために必要である事は直観的に判断される<sup>注3)</sup>。テ形節と主節の同存事象性の傾向が最も強く、テが本質的に持つ特徴のうち膠着の性質がより顕著に表れていると思われる。

また、この用法と他の用法との決定的な相違は、削除可能であるという点である。付帯用法のテ形節を削除しても、「太郎は座って本を読んだ」「太郎は本を読んだ」に事象レベルの違いはほとんど無く文全体の本質的な意味はさほど変わらない。他の用法では、テ形節を削除すると、文の意味に何らかの影響が見られる。この用法と他の用法の境界上にあるものとしては、

(8) 子供達は落ち葉を集めて遊んだ。

の様なものが挙げられる。「落ち葉を集めるという行為で遊んだ」という解釈では付帯的であり「(落ち葉を)集めた後で落ち葉で遊んだ」という解釈では、継起的である。この様に、目的語にも変化が及ぶ客体変化動詞では、継起に傾きやすくなる。

(9) 彼女はうんざりして電話を切った。

の様な心理作用を意味するテ形動詞の場合は、因果を表わすことの方が多くなり、「うんざりしながら」の様な同時性を強調する表現との相違がある。いずれにしても、前述の様に、各用法は連続していく性質のものであり、文脈や読み手の解釈に依存している。

## 2.2 継起用法

(10) ジャガイモの皮を剥いて柔らかくなるまで茹でます。

先行研究を総合して、この用法はテ形接続において最も典型的なものであり、テ形節の事態が生じそれが完了した後に主節事態が生じるという時間的前後関係にある複数の事態をテで繋いだものを指す。連用形接続は一般的に文章に多く用いられ、テ形接続が多く口語で用いられる(三枝(2006)を参照)という相違も影響していると思われるが、テ形節の連続は、口頭で手順方法を説明したり、略歴を述べたり、行動を振り返ったりする動作的事態の連続の場合に典型的に見られる。

継起のテ形節に現れる動詞の性格は、前述の様に動作的・意志的なものが典型的であり、無意志動詞は少なく、同一主語による連続動作が最も自然であるので異主語の場合は少ない。しかし、次の様な事象連続文も存在する。

(11) 新幹線が停車して、どこかで見たことのある女性が降りて来た。

無意志的かつ異主体であっても、因果性を差し挟まない時間的先後関係のみによる事態連続の場合には、やはり継起関係によって解釈が行われる。

また、この用法は、テ形節の事態が生じそれが完了した後に主節事態が生じるという時間的先後関係に支えられて解釈される性質のものであるので、形容詞などの状態性述語、無アスペクト動詞とは折り合いが悪い。テ形節、主節事態共に出現する率が非常に低い事は直観的に判断される。そして、心理動詞や心理形容詞などの開始・終了がはっきりしない性質を持つ心理表現とも適合せず、前後節のどちらかに現れた場合には、因果解釈に傾く傾向が強い。

いずれにしても、この用法は因果用法と連続関係にあり両義的な文も多く、前後の文脈などによって解釈が揺れる事は確かに多い。テ形節や主節が無意志動詞や心理表現、状態性述語などの場合には、因果解釈が強くなる。

(12) 木の実はだんだん重くなって落ちて来ました。

(13) その俳優は映画の主演が決まって有名になった。

いずれも継起的な前後関係があるが、テ形節や主節が無意志動詞であるため、意志制御できない事によって、因果解釈されやすくなっていると思われるが、両義的である。また、意志的動作動詞による事象連続の場合にも、この現象が見られる事がある。

(14) その作家は関西に疎開して芦屋を舞台とした長編小説を書いた。

このような文は、もともと明確な意味区分の必要はなく受け取り手に解釈が委ねられていると考えられる。何らかの理由で因果関係としての視点の統一が起きると因果解釈に傾き、そうでない場合は時間的先後関係が前面に出て継起解釈に傾くと思われる。両義解釈を避けて継起関係を強調したい際には、「疎開してから」の様な継起的要素を入れて文意を明確にすると思われる。

先行研究によっては、三原（2009, 2011）の様に継起と因果を分けない立場を取るものがあるが、純粋な時間的先後関係の事象連続の存在や、述語の性格的な選択制限によるアスペクチュアルな相違という点で、本稿では継起と因果をそれぞれ独立した用法として分類する事とする。

### 2.3 因果用法

(15) 成績が上がって両親に褒められた。

先行研究を総合して、テ形節事態が原因理由になって主節事態の表わす結果を引き起こしているものを因果用法と呼んでいる。前節で述べた様に、無意志動詞が選択されると継起より因果解釈が強くなる傾向がある。前節の例を再掲する。

(16) 木の実はだんだん重くなって落ちて来ました。

(17) その俳優は映画の主演が決まって有名になった。

時間的前後関係があっても、無意志的事態の連続の場合は意志制御されないので、事態連続の解釈は積極動作連続ではなく、「～の結果、～になった。」という因果的事態連続のほうが優勢となる。また、心理・感覚的な事態も因果解釈に傾きやすい。

(18) 子供たちは喜んで、走り回った。

(19) 大きな音でドアが閉まって、びっくりした。

(18) の様なテ形節だけでなく、(19) の様に後続節にも同様の現象が見られ、「～の結果、びっくりした」の様に先行するテ形節は因果解釈されやすい傾向がある。吉永(2008)では、前後節を問わず文中に心理・感覚動詞や心理・感覚形容詞などの心身の状態や変化に関する表現があると、因果解釈に傾き易い事を述べ、これは事象の視点が経験者(Experiencer)である話者に固定される事によって、因果関係との親和性が高くなる事によるとした。日本語記述文法研究会(2008, pp.128-129)でも、心理的な内容を表現するテ形接続文では、因果関係を示すものが多いという記述がある。

(20) 試合で、田中君が二点入れて鈴木君がもう一点入れた。

(21) 試合で、田中君が二点入れて鈴木君はとても嬉しかった。

共に異主語の例であるが、(20) は継起的に解釈され、(21) は因果的に解釈される。(21) では、文全体の視点が鈴木君という経験者主語に固定され因果的な解釈に傾くと思われる。文全体の意味の最終的な決定は、視点がどこに置かれるかに影響される。心理表現があるという事は経験者の視点が存在するという事であり、経験者は動作主などの主語よりも視点が置かれやすい。従って心理表現があると、経験者視点で意味決定されるので、経験者から見てどの様な結果になったかに焦点が当てられ、因果的な解釈に傾くと思われる。

(22) この部屋は涼しくて気持ちがいい。

(23) この頃忙しくてゆっくり話もできない。(二例ともテ形節の後に読点を入れると並列的解釈に傾く。)

継起用法には見られない状態性述語が多く出現する事も、この用法の特徴であり、前述の様な時間的な先後関係の上に成立する因果関係とは異なり論理的な因果関係によって解釈される。また、これらの形容詞の因果文では、テ形節では落ち着きが良く、連用形節ではやや落ち着きが悪いという違いが見られる。

(22)' ? この部屋は涼しく気持ちがいい。

(23)' ? この頃忙しくてゆっくり話もできない<sup>注4)</sup>。いずれにしても、この用法では、テ形節が時間的または論理的な因果関係の原因理由を表現する事が条件となっているため、述語の種類を問わず、付帯・継起と同様に主節との前後入れ替えは成立しない。次節で述べる並列用法では前後節を入れ替えても文の意味に影響が無いが、因果用法では許容されない点で異なっている。

従属節や主節の表わしている事象のタイプと意味解釈は相互に関係しており、意志的動作だけから構成される時間的連続事態の多くは継起関係に解釈され、時間的に連続していてもテ形節か主節のどちらかに無意志的・状态的・心理的事象がある場合には因果解釈に傾くという事が結論

付けられる。形容詞など状態性述語が選択された場合は、時間関係ではなく因果的論理関係で繋がっていると見えるであろう。また、時間的先後関係や論理関係の意味が弱い場合には、これらは並列関係に連続していくと判断される。(20)の文を、「試合展開」という状況設定を抜いて書き換えると、節が無関係になり、並列的な文になる。

(24) 田中君が二点入れて鈴木君が一点入れた。

日本語教育において、特に中国語圏日本語学習者ではテ形接続を他の接続文より過剰使用する傾向があり、形態の簡便さと意味用法の豊富さによるものと思われる。確かに因果用法では、主語の一致や、述語の選択制限も無い様に見え、主従節の組み合わせも自由である様な印象があるが、実際には、それぞれの用法を正しく表わし分ける事は比較的困難であり、過剰使用と共に誤用も多く見られる。

(25) ?有名な選手が参加して試合は面白い。

(26) ?今晚友達が来て飲み物を買います。

これらの誤用の原因を観察すると、テ形接続の因果用法の性質が確認される。

(25)の様に「選手が参加する」という意志的動作事態と「試合は面白い」という主観的で無意志的な状態性事態をそのままテで繋ぐ事は出来ない。また、(26)の様に、動作事態で前後節の時間的關係が逆転しているものもそのままテで繋ぐ事は出来ない。テは、「カラ」「ノデ」の様な強い接続機能は無く、前後節の時間的先後関係や事象内容の論理性や統一性に支えられて意味解釈が与えられる。従って、これらの条件が満たされない場合には正しく解釈されないのである。

## 2.4 並列用法

(27) 遠足で三年生は奈良に行って、五年生は京都に行った。

先行研究を総合すると、この用法は、複数の事態を、生じた時間に関係なく列挙したものである。テ形節事態と主節事態の關係は、節内容がそれぞれ独立して並立している。先行研究を総じてテ形節の従属性が最も低いとみなされ、また、この用法だけが、前後節を入れ替えても文の意味に変化が生じない。(27)を前後節入れ替えた文に書き換えて観察すると、

(28) 遠足で五年生は京都に行って、三年生は奈良に行った。

では、文意に影響は見られない。一般的に關係性の希薄なものを並べた時、並列的に解釈する場合が最も自然であるので、他の用法でも時間關係や論理關係を弱くすると並列的に解釈される。前節の因果用法で挙げた例から「リレーでの試合展開」という状況設定を抜いて書き換えたものを再掲する。

(29) 田中君が二人抜いて鈴木君が一人抜いた。

この文だけでは、時間關係や論理關係の手がかりが無く關係が希薄で、並列解釈するのが自然になる。關係性が希薄であるという事は、言い換えると、因果用法で述べた様に、主語の一致や、述語の選択制限から解放され、主従節の組み合わせが自由であるという事で、状態性述語や異主語の文も多く見られる。

(30) 新しく出来た商業施設の品物は目新しいものが多くて、値段が安い。

(31) 雅子はバッグを買って、明子は靴を買った。

また、時間的な先後関係から逸脱したものも見られる。

(32) 田中君は来年ヨーロッパから帰って来て、鈴木君は今秋アメリカに行く。

この場合、話者の認識の中で二つの事象は並存し、関係は希薄であっても、全く無関係ではない。(32)では、二人の今後の予定という統一テーマによって、テで繋がれていると思われる。

(34) こっちは広くてあっちは狭い。

並列用法には、この様な対比的なものも含め前後節でひとまとまりになっている場合が多い。これらについては、後述の統語的考察で再度述べたいと思う。

### 3. 「並立」タイプと「先後」タイプへの収束

本稿では、上述の四用法がその中核的な意味内容によって、「並立」と「先後」という二つのタイプのうちのどちらかに整理できると考えている。「付帯」「並列」「継起」「因果」のうち、前の二つを「並立」タイプ、後ろの二つを「先後」タイプとして括ることとしたい。ただし、中核的な意味を基準にして括ることは可能であるが、前後節の入れ替えなど、統語的な観点では全同ではないことを強調しておきたいと思う。二つのタイプの中核的な概念を述べる事としたい。

#### 3.1 「並立」タイプ

テ形接続の用法に関する論考では、従属度などの観点から付帯と並列を両極に位置付けるものも多い。しかし、複数事態の時間的・論理的な関係性を中心に考えると、二つの用法は「並立」タイプで括る事ができる。付帯はテ形節事態が起こってほぼ同時（「座って」や「抱えて」では短い動作時間の先行があるが「笑って」などは同時）に主節事態が起こり、主節事態が続く間、テ形節事態と主節事態は並立する。主節事態が主要な意味内容を持ちテ形節事態はその様態を説明するという主従関係は存在するが並立という観点では時間的・論理的に成立する。並列では、テ形節事態と主節事態はそれぞれ独立し、主従関係はなく、また時間的な先後関係も必要ないので前後節の入れ替えが出来る。論理的に、ある統一テーマの範囲内であれば、事態の内容は自由であり、相互に独立して並立していると言える。付帯が時間的な同存性を強く持つのに対し、並列はアスペクトの無いものも選択され時間的な同時性は必ずしも必要ではなく、各事態の時間が逆転し間隔が離れていても許容されるが、論理的に、あるテーマの中で並立している事は必要である。要約すれば、付帯は時間的な並立、並列は論理的並立を中核的な意味としていると言えるだろう。

#### 3.2 「先後」タイプ

先行研究では継起と因果を一類に括る立場もあり、本来共通点は多い。いずれも時間的な先後関

係が必要であり、その関係だけで解釈されるのが、継起であり、それに因果関係が加わり解釈されるのが因果である。従って、これらは連続し「先後」タイプとして括ることができると思われる。因果の意味が強くなる要素、例えば述語の性格や文脈などの存在によって、因果解釈に傾き、無い場合は継起解釈される。しかし、「先後」タイプとして時間の前後関係はどちらも必須であるが、アスペクト的な相違は見られる。継起は、普通テ形節事態が完了してから主節事態が起こる事を表わし、両事態の重なりは意味しない。また、意志的な動作事態の連続が最も一般的であり、状態的なものはテ形節事態完了と主節事態開始という先後と折り返いが悪いので、選択されにくい。それに対して、因果は、時間的前後関係に加え論理的な因果関係に支えられ、原因理由が先行し結果が後から現れるという論理関係の範囲内であれば、テ形節事態完了と主節事態開始の時間関係は継起ほど明確である必要はない。

(35) 一昨日の雨で靴がぐっしょり濡れて、つま先のところがまだ濡れている。

テ形節事態は先行して原因となっているが、主節事態と重なっている。因果では、論理的にテ形節事態の開始が先行しているならば、テ形節事態が完了していなくても主節事態が後続する。また、「涼しくて気持ちがいい」「静かで落ち着く」など状態性述語の場合にはテ形節事態と主節事態が重なっている事も多い。しかし、やはり論理的な先後関係は必要であり、前後節を入れ替える事はできない。因果の場合にはテ形節事態が時間的・論理的に先行している事が条件となる。また、因果用法には時間関係が逆行するものも見られる。

(36) 会議が十時からあって朝早く家を出た。

時間的前後関係は逆になっているが、同様にテ形節事態が論理的に原因として先行し、因果の条件を満たしている。このような場合でも前後節は入れ替えできない。要約すれば、継起は時間的前後、因果は論理的前後を中核的意味としていると言えるだろう。事態間の関係において、先後と並立のどちらがより強いかにによって二つのタイプに分ける事ができると思われる。言い換えると、認知した順に上下に並立して繋がっているのが並立タイプ、時間的論理的な順に線上に繋がっているのが先後タイプという事ができるのであろう。二つのタイプをそれぞれ図1、図2で表わす。

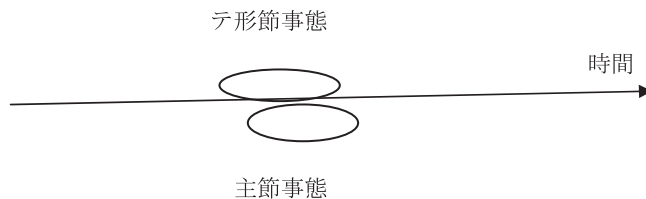


図1 「並立」タイプ

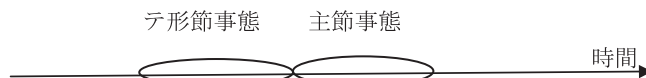


図2 「先後」タイプ

#### 4. テ形節の統語構造について

接続用法のテ形節は、いずれもル形やタ形を許容せず独立して使う事もできないので、定形時制を持たない不定形節であると判断する。Rizzi (1997) の地図製作計画による句構造に準拠して考えれば、FinP (Finite (定形時制) を持つ句) の下位の TP (Tense (不定形時制) を持つ句) 以下という事になる。しかし、どの用法にも否定形「ナイテ、ナクテ」があり、否定句を取り込む事ができるので、VP (動詞句) の上の NegP (否定句) より上に配置されると考えられ、TP (Tense (不定形時制) を持つ句) であると考えられる。付帯以外は異主語も許容され、TP 指定部位置に主語を持つと思われるが、一般的に付帯の場合、同一主語は PRO 主語として音形を伴わずに存在すると考えられる。また、VP ならば許容されない文副詞も許容される。(テ形節を [ ] で示す。)

(37) あのおもちゃは [きつと電池を使って] 動かしているのよ。(付帯)

(38) 肉は [恐らくタレに漬けて込んで] こんがり焼いたのだろう。(継起)

(39) 花子は [きつと体調を崩して] 休職したのだ。(因果)

(40) この十年で [都会に出て行った友人達は恐らくすっかり変わって]、  
故郷で昔のままの生活をしているのは私だけだ。(並列)

総合すると、テ形節は用法の違いを問わず次の様な構造を持つと考えられる。

〈テ形節構造〉 [TP NP(PRO) [T' [VP…V] [T=テ]]]

Tense 要素である T をテと見なす事についての検証は今後の課題であるが、前節までの文法観察を総合して、並立・先後タイプ共にテによって時間的論理的な意味解釈を得ているので、便宜的に T 位置に配置する事とする。また、本稿ではテの接続性は認めるが接続詞 (補文標識) とは考えていない。次に、各用法のテ形節の統語位置について観察したい。最初に結論を述べると、VP 付加、CP 付加、TP (CP) 等位のいずれかに配置され、構造の相違は節の時間的論理的关系によるものと思われる。前掲の例文によって、まず、等位構造か付加構造かを観察する。本稿では、テ形節の様な副詞節の場合、接続詞に導かれる補文節 CP の様な埋め込み構造を取らず、付加構造もしくは等位構造を取ると考えている。等位構造の場合、テをはさんで意味の変化無しに前後入れ替えが許容される。

(41) \*太郎は走ってカバンを抱えた。(付帯)

(42) \*次郎は教科書を買って書籍部に行った。(継起)

(43) \*花子は仕事を一か月休んで体調を崩した。(因果、元の因果関係は保持されない)

(44) 明子が歌を歌って雅子がピアノを弾いた。(並列)

並列だけ前後入れ替えが許容される。また、等位構造制約によれば、節が疑似分裂文の焦点となれる場合は、等位構造ではない事を意味している。(テ形節を [ ] で示す。)

(45) 太郎が学校に通っていたのは、[自転車に乗って] だ。



(46) アキラがその小説を買ったのは、[紀伊国屋に行って] だ。

(47) 花子が仕事を一カ月休んだのは、[体調を崩して] だ。

(48) \*明子が歌を歌ったのは、[雅子がピアノを弾いて] だ。

並列以外は等位構造ではないという可能性が高い。

また、等位節において、一方の動詞のみを尊敬化する事はできない。(テ形節を [ ] で示す。)

(49) 先生が [書類を持って] お帰りになった。

(50) 先生が [書籍部に行って] 教科書をご注文になった。

(51) 先生が [かぜをこじらせて] 一カ月お休みになった。

(52) \*先生が [内容を説明して]、要点を黒板にお書きになった。

並列だけが等位構造であり、他の用法は付加構造を取ると考えられる。次に、各用法が VP、TP、CP 位置のいずれに配置されるかについて観察したい。付帯、継起、因果は付加構造、並列は等位構造を取ると思われるが、VP 位置より上か下か文末の否定作用域にテ形節が収まるかどうかによって測定される。否定辞ナイは VP の上の NegP の主要部とされるので、否定作用域がテ形節まで及ぶという事は NegP の下位、即ち VP 位置に付加され、作用域が及ばない場合は、NegP の上位である TP または更に上の CP 位置に付加されていると考えられる。(否定作用域を [ ] で示す。)

(53) [学校の廊下を走って通ら] ない。(付帯)

付帯の場合は、ほぼ全て否定作用域に入り、VP 位置に付加されていると判断される。

継起と因果では、節関係によって付加位置が異なるものがあると思われる。まず、否定作用域に入り VP 付加と思われるものを挙げる。

(54) 犯人は [ガラスを割って侵入し] なかった。(継起)

(55) 遠足では [列からはぐれて迷子になら] ないように。(因果)

(54) は「犯人は(せっかく)ガラスを割ったのに、[侵入し] なかった。」の様に二つの事態にも解釈できるが、テ形節では解釈が多義になるものがあり、文脈や受け取り手の判断によって決定される。次に、否定作用域に入らず TP または CP 付加と思われるものを挙げる。

(56) その歌手は、2 番まで歌って [3 番を歌わ] なかった。(継起)

(57) 大事な試験があって [休日もゆっくりでき] ない。(因果)

これらは節関係の相違が構造位置に反映していると思われる。単純な時間・論理関係のものは低い位置に付加され、時間・論理関係が複雑なものは高い位置に付加されると思われる。次に、並列について見る。

(58) 雅子は大阪に行って、[明子は東京に行か] なかった。(並列)

(59) 木を見て、[森を見] ない。(並列)

並列は等位構造を取るが、同様に否定作用域に入らないので TP 以上に位置し、TP または CP 等位構造を取ると思われる。

VP 付加以外のものの TP・CP 位置の特定については、より談話的要素が関与するものが多く見

られるため、CP 付加構造を取ると判断したい。これらには次のような例が挙げられる。(疑問の作用域を [ ] で示す。)

(60) 先生の研究室の前まで行って、[あれから結局ドアをロックできなかったの]? (継起)

(61) 一度くらい失敗して、[努力を全部水の泡にしてしまうの]? (因果)

また、並列については、反語的・対比的な対句構造を取るものは TP 等位、節関係がより希薄なものは CP 等位と考えられる。

以上の考察から、これらの四用法の構造位置を二つのタイプと考え合わせる事とする。

〈並立タイプ〉・・・付帯は VP 付加、並列は TP・CP 等位

〈先後タイプ〉・・・継起・因果共に VP 付加または CP 付加<sup>注5)</sup>

両タイプ共に構造位置の高低が観察される。各構造をラベル付き括弧表示で表わす事とする。(テ形節は「～テ」で表わし定形時制句 (FinP) 以上は CP として省略、等位構造は接続要素 and を便宜的に入れる事とし小動詞は省略する)

〈VP 付加構造〉[CP[TP[NegP[VP～テ[VP・・・V]]Neg]T]Fin]

〈CP 付加構造〉[CP～テ[CP[TP[NegP[VP・・・V]Neg]T]Fin]]

〈TP 等位構造〉[CP[TP～テ and[TP[NegP[VP・・・V]Neg]T]]Fin]

〈CP 等位構造〉[CP～テ and[CP[TP[NegP[VP・・・V]Neg]T]Fin]]

## 5. おわりに

付帯は主節事態と重なる副詞的並立であり、並列は統括命題内で等位的に並ぶ論理的並立である。継起と因果はそれぞれの時間や論理関係によって線状に繋がる先後であり、関係性の単純さは構造的な単純さ、即ち句構造位置の低さに反映される。テの持つ時間性と接続性の両機能、即ち近い過去としてのテンスマーカと接続助詞的な膠着性の両面が、テ形接続の各用法に現れており、それぞれの中核的な意味において二つのタイプに整理できる事を提唱したい。

### 注

注 1) 加藤 (1995) を中心に、仁田 (1995) (2010)、三原 (2009) (2011)、南 (1993)、Hasegawa (1996)、内丸 (2006)、Nakatani (2004) らの論考を特に参考にした。

注 2) 吉永 (2008) 第 2 章では付帯用法をテ 1 とテ 2 に分け、更に意味内容によって 5 つに分類しそれぞれの動詞の意味分類について継続性、限界性、意志性の有無などを中心に考察した。

注 3) 三原 (2009) (2011) では、付帯用法の場合、多くのテ形節主語は PRO 主語が設定され主節と一致する場合は多いが、テ形節に非対格動詞を用いた場合などでは、音形を取る別主語が可能であるとしている。

注 4) 形容詞テ形節接続の用法分布については、動詞のそれとはかなり異なっている。付帯では、「静かにドアを開めた、優しく尋ねた」の様に連用形で現れ、テ形「\*静かでドアを開めた、\*優しく尋ねた」では現れない。

注 5) 吉永 (2008) では、付帯、継起を VP 付加、因果を IP 付加、並列を IP 等位としたが、研究を進めた結果、構造をより精密化する事とした。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge: MIT Press. 長谷川信子 (編) (2007) 『日本語の主文現象: 統語構造とモダリティ』 ひつじ書房.
- Hasegawa, Yoko (1996) *A study of Japanese clause linkage*. Tokyo: Kurocio Publishers.
- Hooper, Joan, B. (1975) On Assertive Predicates. J. Kimball (ed.) *Syntax and Semantics* 4, pp.91–124. New York: Academic Press.
- 池谷知子 (2003) 「動詞のテ形接続と複合動詞の境界線—どのような時に2つの動作が1つの動作と捉えられるか—」 *KLS* 24, 関西言語学会.
- 加藤陽子 (1995) 「テ形節分類の一試案 従属度を基準として」 『世界の日本語教育』 5, pp.209–224, 国際交流基金日本語国際センター.
- 川端善明 (1983) 「副詞の条件」 渡辺実編 『副用語の研究』 pp.177–207, 明治書院.
- 國廣哲彌 (1982) 「(テンス・アスペクト) 日本語・英語」 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明 (編) 『講座 日本語 11: 外国語との対照Ⅱ』, pp.2–18, 明治書院.
- Li Ya-fei (1990) On V-V Compounds in Chinese. *Natural Language and Linguistic Theory* Vol.8, No.2, pp.177–207.
- 益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏 (1997) 『岩波講座言語の科学 5 文法』 岩波書店.
- 松村明 (1995) 『大辞泉』 小学館.
- 三原健一 (2009) 「テ形節の統語構造」 大阪大学大学院前期授業資料.
- 三原健一 (2011) 「テ形節の意味類型」 『日本語・日本文化研究』 第 21 号, 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻海外連携特別コース掲載予定
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店.
- Nakatani, Kentaro (2004) *Predicate Concatenation: A Study of the V-te-V Predicate in Japanese*. PhD. Dissertation. Harvard University.
- 仁田義雄 (1995) 「シテ接続をめぐって」 仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』 pp.87–126, くろしお出版.
- 仁田義雄 (2010) 『日本語文法の記述的研究を求めて』 ひつじ書房.
- Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, pp.281–337. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 三枝令子 (2006) 「話し言葉における「テ形」」 『一橋大学留学生センター紀要』 9, pp.15–26.
- 田川拓海 (2008) 「統語構造と活用形の非一対一対応」 日本語文法学会第 9 回大会発表予稿集.
- 高橋太郎 (1983) 「構造と機能と意味—動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐって—」 『日本語学』 2–12, pp.13–21, 明治書院.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版.
- 時枝誠記 (1950) 『日本語文法口語篇』 岩波全書 114, 岩波書店.
- 内丸裕佳子 (2006) 「形態と統語構造との相関—テ形節の統語構造を中心に—」 博士論文. 筑波大学.
- 吉永尚 (2006) 「テ形接続に見られる誤用についての考察」 『園田学園女子大学論文集』 第 40 号, pp.157–163.
- 吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』 和泉書院.
- Yuasa, Etsuyo and Sadock, M. Jerry (2002) Pseudo-Subordination: A Mismatch between Syntax and Semantics. *Journal of Linguistics* Vol.38, No.1, pp.87–111. Cambridge: Cambridge University Press.

[よしなが なお 日本語教育・日本語学]